

様式③

提出日 年 月 日

2017年度 琉球弧研究支援 報告書

研究テーマ「 離島の小中学校における学校存続問題と教育～黒島小中学校～」

氏名：津波古幸菜 宮里雛 與那城五月

所属学部学科：人文学部こども文化学科

I. 初めに

私たちは、鳩間島における養育里親および海浜留学制度について知り、他の離島の小中学校でも同じような取り組みを行っているのか、関心を抱いた。しかし、鳩間小中学校の事情により、日程調整ができなくなって鳩間小中学校での調査が今回はできなくなった。それで、鳩間小中学校と同じような状況にある黒島小中学校の学校存続問題について取り上げ、学校を存続させるためにどのような教育活動を行っているのか調べることにした。

II. 研究の目的、動機

黒島小中学校は全校児童 18 名の学校である。そこで、実際に黒島小中学校に行き、どのような教育を行っているのか、学校存続のためにどんなことをしているのか、児童の進路状況などを明らかにする。

III. 研究方法、地域、期間

- ・9月20日 黒島小中学校訪問
- ・9月21日 石垣市立図書館
- ・現地視察や聞き取り調査を通して、黒島小中学校の現状を把握するとともに、竹富町における学校存続問題について理解を深めていく。
- ・新聞記事、学校記念誌、黒島小中学校の教育計画等を参考にする。
- ・学校の進路状況を児童生徒にインタビューする（そのまま中学校に進学するのか、島外への進路に進むのか）。

IV. 考察

1. 黒島地域の概要

① 自然について

黒島は、竹富町に所属にする離島の一つであり、石垣島の南南西18.5kmの海上に位置する。島の周囲は12.8km、面積13.7平方kmのハート形の隆起サンゴ礁の島である。

② 産業について

島の主産業は肉牛の牧畜で島全体が放牧地である。競り市場は二か月に一回開催され、県内外から多数の牧畜関係者が集まる。近年は、家畜従事者の高齢化等解決すべき課題もあるが、徐々に若者の帰島が増え、明るさが望めるようになっている。水産業面では、島周辺に自生するアーサ（ヒトエグサ）、イーシ（ツノマタ）、クイナ（オゴリノリ）が採取され、出荷されている。

③ 電気・水道について

水道が昭和50年に敷設、西表島から海底送水され、電気は昭和51年5月に海底ケーブルが敷設され、終日送電が可能となり生活は便利になった。

④ 教育・文化について

小学校は明治26年6月に創立で平成4年に100周年を迎え、平成25年には創立120周年記念事業を行っている。中学校は昭和24年4月に新制中学校として創立され、平成11年に50周年事業を行った。

黒島は、1島1校の小中学校併置校である。生徒数は少人数であり、入学以来、複式学級の場合を除けば、同じクラスで卒業まで顔触れが変わらない。そのため、人間関係が安定しており、生活しやすいという特徴がある。しかし、その反面、切磋琢磨することが少なく、競い合って伸びていく環境に乏しい面が見られる。このことは、黒島小中学校に限るものではなく、一般にへき地の学校におけるマイナス面として課題となっているものである。児童生徒の調査としては、明朗で快活、勤労精神に富んでいる。保護者や地域の方々は、学校への愛着と学校教育に対して関心があり、学力向上、学校行事、環境美化作業等に対し、協力的である。黒島における伝統文化の発達は、八重山諸島の場合と同様で、とりわけ民謡や踊りに特色が見られる。民謡では、「山崎のアブジェーマー」「黒島口説」、舞踊では東筋の「獅子の棒」、仲本の「ハデク舞」、保里の「タイラク」等が有名である。これらの伝統文化は、琉球王朝時代の人頭税や寄人制度の重圧や生活苦から生み出されたものである。

2. 黒島小中学校について

小学生12名→小1（5名）小2（0名）小3（4名）小4（1名）小5（2名）小6（0名）
中学生6名→中1（3名）中2（1名）中3（2名）、教師16名の全体で34名となっている。

児童在籍数は増減というよりも横ばい状態であり、1学年あたり2、3名の児童数である。学校教育の取り組みとして学力向上に力を入れている。例えば、東大NETアカデミーやステップアップタイム、びゅんびゅんタイム、ある。東大NETアカデミーは、東大生講師による遠隔ライブ授業のことで、学習の基礎の徹底実践を行っている。また、去年度から年に1度、実際に東大生を招いた授業を行い、普段とは違った学習環境の中で緊張感を持った授業をしている。ステップアップタイムとは中学生が小学生に教える学習である。3年前から導入しており、中学生が小学生に教えることで学習の見直しをすることができる。びゅんびゅんタイムとは、週に2回地域の人を招き、放課後子ども教室を開く。習字や外国語学習、俳句、短歌などが主に開かれている。方言の学習では昔話をアレンジして方言劇を披露する。

卒業後の進路状況については、本島への進学や石垣島での進学が多く、寮が設備されているところへ進むようだ。中卒で就職することはなく、成人した男性が牧畜産業に関わるため、黒島へと戻ってくる。

PTA は島ならではの協力性を活かし、全住民が一体となって学校教育を支えている。現在では、10 世帯（うち 2 世帯は教員、8 世帯は地域）が PTA として活動している。島の卒業生の親が準 PTA となっているため、全島民が学校関係者である。

V. 結果

学校存続のために現在は里親制度は行われていない。しかし、過去 2 回にわたって行われたことがある。次年度の入学者の予定はいまのところいない（保育園の年長者がいないため）。学校存続のことで取り組んでいることはないようだ。ただ島全体での行事として、豊年祭や牛祭りがあり、老若男女一体となって島を盛り上げている。

VI. 今後の展望

今回は、黒島小中学校について調査したが、他の離島小中学校やへき地校における存続問題や取り組みについて調べ、教育課題に視野を広げていきたい。

VII. 終わりに

今回、私たちに黒島小中学校の教育についてや地域住民との関わりなどについてのお話などで時間を割いて研究に協力して下さった黒島小中学校の先生方、インタビューに協力して下さった児童生徒の皆様、そしてこのような機会を与えて下さった地域研究所の皆様に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

VIII. 参考文献、調査協力

平成 29 年度教育計画（黒島小中学校）

IX. 指導教員コメント

鳩間島における学校存続問題について調査研究をしようとしたが、鳩間小中学校の事情により調査が出来なかった。しかし、同校と同じような課題を抱えている黒島小中学校を調査対象にすることで、竹富町内の学校存続問題に関する研究を進めていく契機とすることが出来た。そのことが今回の調査研究の成果の一つであると思う。内容的には、黒島の人達の学校教育への関心の高さや協力の度合いの高さを学力向上での取り組みを通して確認することが出来た。学校のほうは直接的には学校存続問題について取り組みを行ってはいなかった。（教育委員会のほうがこの問題について検討していたことが分かった。）しかし、学校の方は存続問題については取り組んでいなかったが、学力向上に取り組み、信頼される学校づくりを行うことで、学校が存続されるような状況を作り出しているように思われた。そのことが明らかになったことが研究の成果と考えられる。